

私が幼児教育を志した頃(18)

津守 真

バチエルダ家

リチャード・バチエルダ氏は弁護士だった。弁護士にありがちな鋭いところがなく、静かな人で、ミネソタ大学で非常勤講師をしていた。私がアメリカに来るための書類はバチエルダ氏が作成されたことをここに来てはじめて知った。ヴエスター夫人は穏やかな美人である。家はそんなに大きくないが、端然としたきれいな家だった。娘のアンは十六歳で、背が高くて、身なりを構わず、大声で賑やかに話す普通の女の子だった。息子は十二歳で、私が行くのを待ちかねていて、アンティーケ自動車の行列を見に行こうと一緒に自転車に乗って見に行つた。行列は予定より一時間も遅れて

一、三分で通りすぎてしまつた。



バチエルダ夫人は料理が好きで、毎晩自分で食卓の飾り付けをして、私は夕食が楽しみだつた。日曜日の朝は、特別にマツフィンを焼いた。一九五〇年代初めのアメリカの家庭は、主婦が家庭料理を作るのが普通だつた。バチエルダ家ではよくアップルパイを焼いて、夜になつてから皆で居間でしゃべりながら作りたての熱いパイを食べた。私が行つて一週間ほどたつたとき、興味があつたら古い家族写真を見ないかとバチエルダ氏夫妻が私の部屋まで呼びに來た。結婚式の写真はハリウッドのスターのようだつたし、子どもたちが小さいときの写真は自然に人柄と愛情がじみ出でいて感じがよかつた。どこの国でも家族は皆同じだとあらためて思った。それを見ながら私は愛育研究所の先輩の児童心理学者の竹田俊雄先生のことを思った。先生には多勢の子どもさんがおられたが戦災で家を焼かれて、その当時、三階の研究室の隅をカーテンで仕切つてひとりで生活しておられた。先生は一着のモーニング（礼服）を昼も夜も着ておられた。あるとき私が見せていただいた写真は、和服姿のご夫妻と子どもさんが床の間の前で火鉢を囲んでおられる家族写真だつた。戦前の東京ではごく普通の風景だつた。私は敗戦直後の日本の家庭と社会の現実とをつい対比して考えた。バチエルダ氏夫妻が結婚したのは十九年前とのことで竹田俊雄先生も同年配である。バチエルダ氏夫妻とはときどき夜遅くまでしゃべつた。私は自分の意見を率直に語



り、自分が話すことが知的に受け入れられるのを感じた。話しているうちに分かつたのだが、バチエルダ氏は共同募金協会の専門の弁護士で、離婚、家族問題、児童保護の相談が専門だった。こういう人が弁護士をしていればその市は良くなるに違いないと思った。バチエルダ氏から子どもと家族に関する法律の本を二冊サインいりで頂いた。バチエルダ夫人は清潔好きで、整頓された居間にはいつも厚いカーテンがかけられて薄暗かった。自分は光が眩しくて苦手なのだと黙っておられた。(バチエルダ夫人は一九七〇年頃に失明されてケアつき病院に入られ、間もなくご主人のバチエルダ氏は亡くなられた。夫人は目は見えないがいまも健在である。私が一九九六年にそのホームを訪ねたときには、ミネソタ大学の訪問教授システムを活用し、毎週、文学や社会学の講義を受け、大学の単位をいくつも意欲的に取つておられた。)

日本から私に届く友人や先輩からの手紙には、ミネソタのような田舎ばかりにいないで、大都市にも行きなさいと書いてあつたが、私はこの美しい町に留まつて家族ぐるみでここの人々と付き合ふ生活が好ましかつた。バチエルダ氏はニューヨークに行つたことがないし、トンプソン夫人もワシントンに行つたことがなかつた。まして敗戦国の一留学生が東部にまで旅行するなど想像もできなかつた。しかし東部に旅行する機会は思いがけず早くに來た。バチエルダ家に滞在していたとき、私はイリノイ州ジャクソンヴィルで開催された世界キリスト教学生青年会議に出席することになつ

た。私はそのついでに、かねてから興味があった進歩主義教育の歴史を国会図書館で調べるために、米国の首都ワシントンD.C.にまで足をのばすことにした。

米国の進歩主義教育の歴史

前に記したように、私は岡部弥太郎先生からフレーベルを学び、フレーベルの幼稚園が米国で批判を受けたのは知っていたが、フレーベルの何が批判され、何が進歩主義教育に継承されたのか、疑問のままだった。その後、私は愛育研究所で、山下俊郎先生から、ヴァンデウオーカー・N・C著『アメリカの教育における幼稚園』を見せられた。一九〇八年に出版されたその小さな書物には、十九世紀半ばのピーボディの幼稚園創始から進歩主義教育に至る米国の幼稚園の歴史が記されていたが、それを担っていた人たちがどのような人だったのか、それがどのようにして現代の幼稚園につながるのかは分からなかつた。

ミネソタ大学児童研究所は、進歩主義教育の最盛期である一九二五年の創立で、付属のナースリースクールは遊びを主としていた。ミネソタ大学で幼児教育を担当していたDrエリザベス・メチャム・フラーの講義では、私は数少ない学生の一人だつた。児童研究所の隣の建物がナースリースクールだったので、私はしばしば幼児と遊びに出かけたし、お茶の水女子大学附属幼稚園と共に通点があつたので、主任のミス・ヘッ



ドリとはよくおしゃべりをした。彼女はACEI（万国幼稚教育協会）のリーダーで、幼稚園の実際の著書があった。私の指導教官であるハリス先生からは児童研究所のテーマのひとつであるグッドイナフの描画テストの実験的研究のテーマを与えられていたが、思いきってこのことを話した。せっかく米国まで来たのだから、自分だったらあなたが言うように自分の関心を追求するだろうと言われた。夏になる前から、私はミネソタ大学図書館の中にキャレル（大学院専用の個人机）をもらつており、必要な文献の見当をつけていた。私が目を通したいと思っていた雑誌に欠本があり、ワシントンの国会図書館まで行けば見つかるだろうと期待していた。

人種国籍を越えて—世界キリスト教学生青年会議

一九五二年八月二十七日に、私は世界キリスト教学生青年会議に出席するため、ビルグリムファウンデーションの学生四人と一緒の自動車で朝四時半に出発した。ミネソタからは私の親しい学生が更に数人加わって心強くなつた。世界会議といつても米国人の学生が大部分で、それに米国に留学していた外国人学生が加わつた。自然に恵まれた美しいキャンパスで、朝は緑の木陰でのめいめいの聖者研究から始まり、基調講義、討論と四日間つづいた。私はいつも日本の国を対比して考えていた。当時の日本の社会には貧民窟が満ちており、年に一〇〇万の人口増加率で、そのなかで人間



が育ち、その人間のために何ら準備もない。豊富な経済力と広大な土地と白人種とが結び付いてでき上った大国アメリカとの対比は大きかつた。集まつた人々は皆良い人たちなのだがそういう中にいると、孤独を感じさせられた。神学者ビル・イーストンの基調講義は、人間は究極において孤独（aloneness）であるということから始まつた。人間は自分を十分に理解してくれる人を見つけて結婚して家族をつくる。けれども自分の存在意識は自分だけしかもつていないので、その意味で、人間は孤独であり、ただひとりである。その孤独が友情の土台でもある。しかしながら、人種、国籍を異にする人々の間に本当の理解があり得るのだろうか。人種国籍を越えて友情はありうるのかとビル・イーストンは問いかけた。

当時の米国では、州によっては黒人はバスの座席も異なり、白人のレストランに行くと断わられた。私のいたミネソタではそういうことはなかつたが、それを体験した外国人学生たちは、民主主義の国アメリカでこんな差別が行われていることに憤慨した。米国人の学生たちはそれに良心的に応答し、討論は夜まで続いた。黒人差別の行わっていた南部出身の学生たちも、率直に自分たちの非を認め、どうすればよいかを本気に考えた。

ビル・イーストンはロマ書十一章十二章を引用して神学者の立場で明快にそれを語つた。人種国籍を越えた愛を、身をもつて示したのがイエスである。そのイエスに



よつてユダヤ教は一民族の内部のものではなく、民族を越えたキリスト教になった。イエスに結ばれて人種の差別は消滅する。それを生活の中で実践することがいま求められていることであり、それがなければいつまでも世界平和は来ないだろう。イエスはいまもなお、我らの間に来たり、汝ら互いに愛すべしと語りかけている。人は常に心を新たにして自分が変えられねばならない。

ひとつ仮定を立てて見よう。神の前には国籍もなく、人種もなく、職業の貴賤もなく、地位の上下もなく、皮膚の色もない。もしそうならば、人は互いに互いを裁きあつたり、排斥したりできないだろう。それなのになぜ人は互いに差別しあうのだろう。自分というものがこびりついているからである。自分はこういう地位をもつてゐる。自分はこういう能力をもつてゐるというような。いつたいどこまで自分がつきまとひ、自己を誇る気持ちがついてまわるのか。神の前に平等になつて等しく結ばれた人たちが経験を分かち合い、物質を分かち合い、魂を分かち合つて、新しい社会をつくること、それが平和への道ではないか。

この時から三〇年後に米国で黒人の差別撤廃が実現した。もちろんこれは多くの人々の努力の結果であるが、当時の米国の青年たちの力もそれに加わっていたであろう。

四日後、最後の聖餐式を終えて、再び友人の車に同乗し、夜通し東へ東へと走り続

け翌日の夕方、ワシントンDC行きのバスに乗った。

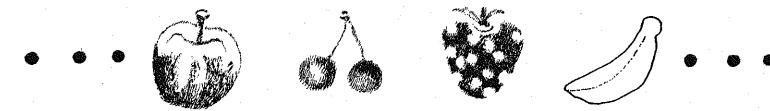
ワシントン

ワシントンでは北川先生やトンプソン夫人から紹介された家庭に泊めていただくことになっていた。最初の三日間泊まつた日系アメリカ人二世の竹下さんは、国会図書館で医学雑誌の日本語翻訳係りをしておられたのは幸いだつた。早速私はワシントンに来た目的を話し、翌日は竹下さんに案内されて国会図書館に行つた。日本語の蔵書の量に圧倒された。三木安正編の『精神薄弱児の教育』の中に私の書いたものまであつた。竹下さんは、日本の古典に親しむことは日本人以上で、真摯なクリスチヤンで、アメリカの政策の批判家でもあつた。こういう日系人がここで重要な地位を占めていることを私は誇らしく思つた。一世の竹下さんは四十年前に米国に来て孫が四人いた。刺身とお茶漬けをご馳走になり、久しぶりに日本の味にふれた。進歩主義教育に関する文献については私が期待していたほどものではなく、丸一日を割くだけで済んだ。途中、偶然に米国公文書館で日本の降伏文書のオリジナルを見た。裕仁と署名してあつた。ならんで梅津大将、島田大将の署名があつた。梅津大将の字は立派だった。



コロネル・ド・ギャンの家で

ワシントン滞在の最後の日、このシリーズの(5)に記したが、占領軍に接収された私の家に泊まっていたコロネル・ド・ギャンの家を訪ねた。ワシントンの郊外にあるその家は、典型的なアメリカ人の家で、夫婦で働いていた。私の父がだいじにしていた屏風を見たときには一瞬心が騒いだが、一留学生の私は、占領軍時代の上下関係とは一切関係なく親しく迎えられた。コロネル・ド・ギャンは軍の歯科技巧師だったが、もともと偉ぶったところがなかつたが、今回は軍服ではなかつたので一層親しみを感じた。あのころ幼児だったサンドラは十歳になり、その下に三歳のキニーともうひとりの赤ん坊がいた。ド・ギャン夫人は以前からのヒステリーが一層ひどくなつていて、児童心理学を学んでいた私にはそれが気になつた。どこの国にもいろいろの人がいるのは当たり前だが。母親は、キニーが外で遊んでいるとピアノの練習をしなさいと呼びいれ、三十秒もたたないうちにピアノの音を静かに、赤ん坊が起きると怒鳴る、また一分もたたぬうちにご飯ですよと言つて呼び、それから十五分もたつてからようやく夕食になるという具合である。キニーは頭がいいから母親に適当に合わせていた。昨夜は母親がサンドラの爪を切つていて深爪をし、サンドラが痛いというのに、そんなことで泣くのはみつともないといつて叱る。とうとう深爪でひどく血を出した。





サンドラは、私がスープケースをつめているところに来て、帰ってはいやだと泣いた。彼女は学校を二ヶ月前に転校したばかりで、学校がいやでしようと私に訴えた。夕方薄暗くなるまで私の傍らを離れないで、家の前の階段に腰掛けて一緒に空を見ていた。私は心を後に残しつつ、ド・ギャン夫妻が帰宅する前に辞去した。

久し振りにミネアポリスに戻った私には日本からの懐かしい手紙の束が待っていた。バチエルダ夫人の家庭料理を食べて薄暗い居間でワシントン旅行の報告をしながら、私は長い旅の後に自分の家に帰ったような落ち着きを取り戻した。秋の学期からはミネソタ大学児童研究所の全教授が参加して「児童発達・運動、知能、言語、社会」が始まることになつており、また、Dr.ジョン・E・アンダーソンの上級セミナー・「発達理論」の受講を私は許可されていた。パーソナリティ理論のH・A・マレー やO・H・マウラーを取り上げられることになつていて、二十六歳の私は自分の本来自の学問に取り組めことに心が踊つた。